

Ⅱ 特別の教科 道徳（道徳科）

小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編 以下『小解説』と略記する。

中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編 以下『中解説』と略記する。

1 道徳科の目標（小解説 P. 16、中解説 P. 13）

(1) 道徳科の目標

第1章総則の第1の2に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目指す。

【小学校】

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。



【中学校】

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

(2) 道徳性を養うために行う道徳科における学習の具体的な目標

① 小学校における具体的な目標

- ア 道徳的諸価値について理解する
- イ 自己を見つめる
- ウ 物事を多面的・多角的に考える
- エ 自己の生き方についての考えを深める

② 中学校における具体的な目標

- ア 道徳的諸価値についての理解を基にする
- イ 自己を見つめる
- ウ 物事を広い視野から多面的・多角的に考える
- エ 人間としての生き方についての考えを深める

(3) 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる

道徳教育は道徳性（人間としてよりよく生きようとする人格的特性）を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳の実践意欲と態度を養うことを求めている。

これらの道徳性の諸様相には、特に序列や段階があるということではない。一人一人の児童生徒が、道徳的価値を自覚し、小学校においては自己の生き方についての考えを深め、中学校においては人間としての生き方について深く考え、日常生活や今後出会うであろう様々な場面及び状況において、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質を意味している。

- ・道徳的判断力は、それぞれの場面において善悪を判断する能力である。つまり、人間として生きるために道徳的価値が大切なことを理解し、様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるかを判断する力である。的確な道徳的判断力をもつことによって、それぞれの場面において機に応じた道徳的行為が可能になる。
- ・道徳的心情は、道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情のことである。人間としてのよりよい生き方や善を志向する感情であるとも言える。それは、道徳的行為への動機として強く作用するものである。
- ・道徳の実践意欲と態度は、道徳的判断力や道徳的心情によって価値があるとされた行動をとろうとする傾向性を意味する。道徳の実践意欲は、道徳的判断力や道徳的心情を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志の働きであり、道徳的態度は、それらに裏付けられ

た具体的な道徳的行為への身構えとすることができる。

2 指導計画作成上の配慮事項（小解説 P. 72、中解説 P. 70）

（1）年間指導計画の意義 ※_____は、中学校のみに記載

年間指導計画は、道徳科の指導が、道徳教育の全体計画に基づき、各教科等の年間指導計画との関連をもちながら、児童生徒の発達の段階に即して計画的、発展的に行われるように組織された全学年にわたる年間の指導計画である。

年間指導計画の重要な意義

- ・ 小学校においては6年間、中学校においては3年間を見通した計画的、発展的な指導を可能にする。
- ・ 個々の学級において道徳科の学習指導案を立案するよりどころとなる。
- ・ 学級相互、学年相互の教師間の研修などの手掛かりとなる。

（2）年間指導計画の内容

① 各学年の基本方針

② 各学年の年間にわたる指導の概要

- ・ 指導の時期 ・ 主題名 ・ ねらい ・ 教材 ・ 主題構成の理由
- ・ 学習指導過程と指導の方法 ・ 他の教育活動等における道徳教育との関連 など

※校長や教頭などの参加や保護者や地域の人々の参加・協力の計画などを示すことも考えられる。

※指導の時期、主題名、ねらい及び教材を一覧にした配列表だけでは年間指導計画としては機能しにくいいため、一覧表を示す場合においても、学習指導過程等を含むものなど、各時間の指導の概要が分かるようなものを加えることが求められる。

③ 年間指導計画作成上の創意工夫と留意点

- ・ 主題の設定と配列を工夫する
- ・ 計画的、発展的な指導ができるように工夫する
- ・ 重点的な指導ができるように工夫する
- ・ 各教科等、体験活動等との関連的指導を工夫する
- ・ 複数時間の関連を図った指導を取り入れる
- ・ 特に必要な場合には他学年段階の内容を加える（小学校）
- ・ 時期、時数の変更やねらいの変更等、計画の弾力的な取扱いについて配慮する
- ・ 年間指導計画の評価と改善を計画的に行うようにする

3 道徳科の指導（小解説 P. 78、中解説 P. 76）

（1）指導の基本方針 ※_____は、中学校のみに記載

道徳教育においては、各教科、外国語活動（小学校）、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、年間指導計画に基づき、児童生徒や学級の実態に即し、道徳科の特質に基づく適切な指導を展開しなければならない。そのためには、以下のような指導の基本方針を、小学校においては確認する必要がある、中学校においては明確にして指導に当たる必要がある。

【小学校】

- ① 道徳科の特質を理解する
- ② 教師と児童、児童相互の信頼関係を基盤におく
- ③ 児童の自覚を促す指導方法を工夫する
- ④ 児童の発達や個に応じた指導を工夫する
- ⑤ 問題解決的な学習、体験的な活動など多様な指導方法の工夫をする
- ⑥ 道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実する

【中学校】

- ① 道徳科の特質を理解する
- ② 信頼関係や温かい人間関係を基盤におく
- ③ 生徒の内面的な自覚を促す指導方法を工夫する

- ④ 生徒の発達や個に応じた指導方法を工夫する
- ⑤ 問題解決的な学習、体験的な活動など多様な指導方法の工夫をする
- ⑥ 道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実する

4 指導の配慮事項 ※_____は、中学校のみに記載（小解説 P. 87、中解説 P. 86）

(1) 道徳教育推進教師を中心とした指導体制

道徳科は、主として児童を周到に、生徒をよく理解している学級担任が計画的に進めるものであるが、学校の道徳教育の目標の達成に向けて、学校や学年として一体的に進めるものでなくてはならない。そのために、指導に際して全教師が協力し合う指導体制を充実することが大切になる。

(2) 道徳科の特質を生かした計画的・発展的な指導

各教科等で行う道徳教育は、全体計画によって計画的に行うものもあれば、児童生徒の日々の教育活動の中で見られる具体的な行動の指導を通して対処的に行うものもある。道徳科の指導は、学校の道徳教育の目標に向かって、教育活動全体を通じて行う道徳教育との関連を図りながら計画的・発展的に行うものである。

(3) 児童が主体的に道徳性を養うため、生徒が主体的に道徳性を育むための指導

道徳教育の本来の使命に鑑みれば、特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するように指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない。むしろ、多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、人間としてよりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道徳教育が求めるものと言える。

(4) 多様な考え方を生かすための言語活動

学校の教育活動全体で言葉を生かした教育の充実が求められている。言語は、知的活動だけでなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤である。道徳科においても、その言葉を生かした教育についての充実が図られなければならない。

(5) 問題解決的な学習など多様な方法を取り入れた指導

道徳科の特質を生かすことに効果があると判断した場合には、多様な方法を活用して授業を構想することが大切である。道徳科の特質を生かした授業を行う上で、各教科等と同様に問題解決的な学習や体験的な学習等を有効に活用することが重要である。その際、中学校では生徒の発達の段階や特性等を考慮した上で、人間としての生き方について多面的・多角的に考え、話し合いや討論することを通して、主体的かつ自発的な学習を展開できるように創意工夫することが求められる。

(6) 情報モラルと現代的な課題に関する指導

社会の情報化が進展する中、児童生徒は、学年が上がるにつれて、次第に情報機器を日常的に用いる環境の中に入っており、学校や児童生徒の実態に応じた対応が学校教育の中で求められる。これらは、学校の教育活動全体で取り組むべきものであるが、道徳科においても同様に、情報モラルに関する指導を充実する必要がある。

また、現代社会を生きる上での課題を扱う場合には問題解決的な学習を行ったり、小学校では話し合いを、中学校では討論を深めたりするなどの指導方法を工夫し、課題を自分との関係で捉え、その解決に向けて考え続けようとする意欲や態度を育てることが大切である。

(7) 家庭や地域社会との連携による指導

道徳科は全教育活動を通じて行う道徳教育の要であり、その授業を公開することは、学校における道徳教育への理解と協力を家庭や地域から得るためにも、極めて大切である。

また、道徳科は家庭や地域社会との連携を進める重要な機会となる。その実施や教材の開発、活用などに、保護者や地域の人々の参加や協力を得られるよう配慮していくことが考えられる。

5 道徳教育・道徳科における評価の意義（小解説 P. 107、中解説 P. 109）

(1) 道徳教育における評価の意義

- ・他者との比較ではなく児童生徒一人一人のもつよい点や可能性などの多様な側面、進歩の様子などを把握し、年間や学期にわたって児童生徒がどれだけ成長したかという視点を大

切にすることが重要である。

- ・教師が児童生徒一人一人の人間的な成長を見守り、児童生徒自身の自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し、それを勇気付ける働きをもつようにすることが求められる。

(2) 道徳科における評価の意義

- ・児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。
- ・道徳科において養うべき道徳性は、児童生徒の人格全体に関わるものであり、数値などによって不用意に評価してはならない。
- ・授業における指導のねらいと関わりにおいて、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉えて、個々の成長を促すとともに、授業者の指導を評価し、改善に努めることが大切である。

6 道徳科における児童生徒の学習状況及び成長の様子についての評価

(小解説 P.109、中解説 P.111)

(1) 評価の基本的態度

- ・道徳科で養う道徳性は、児童生徒が将来いかに人間としてよりよく生きるか、いかに諸問題に適切に対応するかといった個人の問題に関わるものである。よって小・中学校それぞれの段階でどれだけ道徳的価値を理解したかなどの基準を設定することはふさわしくない。
- ・教師と児童生徒との人格的な触れ合いによる共感的な理解を基盤として、その上で児童生徒の成長を見守り、努力を認めたり、励ましたりすることによって、児童生徒が自らの成長を実感し、更に意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価を目指す。
- ・道徳性は、極めて多様な児童生徒の人格全体に関わるものであることから、評価に当たっては、個人内の成長の過程を重視すべきである。

(2) 道徳科における評価

① 道徳科に関する評価の基本的な考え方

- ・道徳性の諸様相である道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度のそれぞれについて分節し、学習状況を分析的に捉える観点別評価を通じて見取ろうとすることは、道徳科の評価として妥当ではない。
- ・道徳科の目標に掲げる学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を、一定のまとまりの中で、児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を適切に設定しつつ、学習活動全体を通して見取ることが求められる。
→個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価
→他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行う。

〈重視するポイント〉

- ・学習活動において児童生徒が道徳的価値やそれらに関わる諸事象について他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか。
- ・道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか。

② 個人内評価として見取り、記述により表現することの基本的な考え方

ここに挙げる視点はいずれについても例示であり、指導する教師一人一人が、質の高い多様な指導方法へと指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにするという道徳科の評価の趣旨を理解したうえで、学校の状況や児童生徒一人一人の状況を踏まえた評価を工夫することが求められる。

ア「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させている」ことに関する視点の例

- ・道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしていることに着目する。
- ・自分と違う立場や考え方、感じ方を理解しようとしていることに着目する。

- ・複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を広い視野から多面的・多角的に考えようとしていることに着目する。

イ「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めている」ことに関する視点の例

- ・読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしていることに着目する。
- ・現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直していることがうかがえる部分に着目する。
- ・道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めていることに着目する。
- ・道徳的価値の実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしていることに着目する。

ウ 発言が多くない生徒や考えたことを文章に記述することが苦手な児童生徒が、教師や他の児童（生徒）の発言に聞き入ったり、考えを深めようとしたりしている姿に着目するなど、発言や記述ではない形で表出する生徒の姿に着目するということも重要。

エ 年間や学期を通じて、当初は感想文や質問紙に、感想をそのまま書いただけであった児童（生徒）が、学習を重ねていく中で、読み物教材の登場人物に共感したり、自分なりに考えを深めた内容を書くようになっていたりすることや、既習の内容と関連付けて考えている場面に着目するなど、一単位時間の授業だけでなく、生徒が一定の期間を経て、多面的・多角的な見方へと発展していたり、道徳的価値の理解が深まったりしていることを見取るという視点もある。

③ 評価のための具体的な工夫

児童生徒が学習活動を通じて多面的・多角的な見方へと発展させていることや、道徳的価値の理解を自分との関わりで深めていることを見取るための様々な工夫が必要である。

ア 学習の過程や成果などの記録を計画的にファイルに蓄積したものや道徳性を養っていく過程での児童生徒自身のエピソードを累積したものを評価に活用すること、作文やレポート、スピーチやプレゼンテーションなど具体的な学習の過程を通じて児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握することなどが考えられる。

評価に当たっては、記録物や実演自体など成果物そのものに優劣を付けて評価するわけではないことに注意することが必要である。

イ 児童生徒が行う自己評価や相互評価は、それ自体が児童生徒の学習活動であり、教師が行う評価活動ではない。しかし、児童生徒自身がよい点や可能性に気付くことを通じ、主体的に学ぶ意欲を高めることなど、学習の在り方を改善していくことに役立つものとして、効果的に活用し学習活動を深めていくことは重要である。年度当初に自らの課題や目標を捉えるための学習を行ったり、年度途中や年度末に自分自身を振り返る学習を工夫したりすることも考えられる。

ウ 年に数回、教師が交代で学年の全学級を回って授業を行うことは、教師が専門教科など、得意分野に引きつけて授業を展開できたり、何度も同じ教材で授業を行うことにより指導力の向上につながったりするなど指導面の利点がある。また、学級担任が自分のクラスの授業を参観することが可能となり、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子をより多面的・多角的に把握することができるといった評価の改善の観点からも有効である。

④ 児童生徒の状況に応じた指導と評価

発達障害等のある児童生徒や海外から帰国した児童生徒、外国人の児童生徒など、いわゆる外国につながる児童生徒に対する指導や評価を行う上では、学習の過程で考えられる「困難さの状態」を把握した上で必要な配慮が求められる。評価に当たっては、配慮を伴った指導を行った結果として、多面的・多角的な見方へ発展させていたり道徳的価値を自分のこととして捉えていたりしているか見取る必要がある。

7 道徳科の授業に対する評価 ※_____は、中学校に記載（小解説 P. 115、中解説 P. 117）

- ・学習指導過程は、道徳科の特質を生かし、道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、自己の

生き方について（中：人間としての生き方について）考えを深められるよう適切に構成されていたか。また、指導の手立てはねらいに即した適切なものとなっていたか。

- ・発問は、児童生徒が広い視野から多面的・多角的に考えることができる問い、道徳的価値を自分のこととして捉えることができる問いなど、指導の意図に基づいて的確になされていたか。
- ・児童生徒の発言を傾聴して受け止め、発問に対する児童生徒の発言などの反応を、適切に指導に生かしていたか。
- ・自分自身との関わりで、物事を広い視野から多面的・多角的に考えさせるための、教材や教具の活用は適切であったか。
- ・ねらいとする道徳的価値についての理解を深めるための指導方法は、児童生徒の実態や発達の段階にふさわしいものであったか。
- ・特に配慮を要する児童生徒に適切に対応していたか。